2021 年 6 月 18 日
東京学芸大学　文部科学省委託「高等学校における日本語指導体制整備事業」2021
企画開発会議調査部会　第 1 回ヒアリング資料
岐阜県立八百津高等学校

岐阜県立八百津高等学校における外国人生徒等の教育

本校は創立 78 年目を迎える高校である。33 年前に中山間地である現在の地に町の中心部から移転した。20 年ほど前までは鉄道で近隣の可児市から生徒の多くは通っていたが、過疎化が進む中でその鉄道(名鉄)も廃線となり電車とバスを乗り継いでの登校となってしまった。連携型中高一貫教育に 18 年前から取り組み、町内から通う生徒が増加し、可児市や美濃加茂市からの通学者は当時減少した。しかし近年、町内の生徒数の減少から、可児市・美濃加茂市からの入学生が急激に増加している。外国人もその頃から可児市・美濃加茂市に増加し始めた。しかし、遠方ということで外国人の入学生は微増するだけであった。その頃、近隣の東濃高校の外国人入学者は増加傾向であった。

しかし、5 年ほど前から本校を希望する外国人が増加し始め、カタカナ氏名の生徒が増えていった。入試でも外国人枠での受験生(2 名)が 3 年前に初めてあった。

本校を希望する外国人の特徴は近隣の東濃高校とは違う傾向がみられる。東濃高校を希望する生徒は外国人としてこれからも生きていきたい、外国人の集団を大切にしたい生徒が目指す学校となり、本校を志望する生徒は外国人ではあるが日本人の社会にこれから生きていきたいという生徒たち、つまり将来もこの日本社会で日本語を習得して日本人として生活していきたいと望む生徒である。

また、本校には外国人生徒適応指導員は配置されておらず、東濃高校に勤務する 2 名のポルトガル語・タガログ語の指導員を保護者懇談時などに派遣依頼をしているだけである。日々の授業も全て日本語のみでの対応であり、それらの支援についても一切県からはされていない。

入学時には日本語に不慣れな生徒たちも入学後に懸命に日本語を学び、日本語の会話力を磨いている状態である。授業で使用するプリント類も全て日本語なので外国人生徒たちは入学するまでにある程度は日本語で話し、日本語で文章を書く力が必要である。若い力と吸収力で入学当初は苦労した生徒も月日の経過とともに日本語力が身に付いている。

進路指導・キャリア教育面では前述したように、日本人として日本社会に根付いて生活したいという生徒が多いために、何ら本校の日本人生徒と差別化した指導は行っていない。就職先・進学先も他の生徒たちと同じである。しかし、このコロナ禍の中で保護者の生活は苦しくなっており進学したくてもできない生徒などが増えていることは現状としてある。

日々の部活動も積極的に参加する外国人生徒も多く、今年もボート部部員として 3 年間活動しインターハイに出場する生徒もいる。また別紙の新聞記事のように母語でもないにも関わらず、英語学習に熱心に取り組み英語検定準 1 級に合格する生徒もいる。就職についても様々な言語能力を認められて外国人労働者が多い企業の事務職に就き外国人労働者の通訳にあたっている生徒などもいる。また、本校の卒業生 2 名が東濃高校の外国人生徒適応指導員として勤務している。

本校は人道の町、杉原千畝の由来の地として、人道教育にも力を入れるとともに、連携型中高一貫教育校、そして全国でも珍しいデュアルシステム(企業実習)にも取り組んでいる高校である。そのため、地域との触れ合いも多く、岐阜県が進めているふるさと教育にも熱心に取り組んでいる。外国人生徒も町内の様々な行事やボランティア活動に参加することで、地元に対する愛着心や本校に対する帰属意識を培ってきた。しかし、コロナ禍の中で、それら多くの活動ができない状態がすでに 1 年以上続いていることも現実としてある。

日本人として生きていく上で必要なマナーや習慣、人間関係を育むための行事をこれからどうしていくかが課題として存在する。また、これは外国人家庭に限ったことではないが保護者の生活がコロナで困窮になりつつある中で、一人ひとりをより注意深く見る必要がある。

中日新聞　2021年(令和3年)3月25日(木曜日)

英検準1級 2人合格の快挙

八百津高の坂本さん、山之内さん

比出身、教員らが受験後押し

八百津高校（八百津町）二年の坂本ミュージーさん（ム）＝可児市下恵土＝と二年の山之内マイケルさん（ル）＝同市今渡＝が、英検の準1級に合格した。準1級は「大学中級程度」とされる難易度で、同校から一度に二人の合格者が出るのは初めてという。（渡辺大地）

英検準1級の合格証明書を手に笑顔を見せる坂本さん右と山之内さん＝八百津町の八百津高で

坂本さんは三年前、山之内さんは二年前に来日するまでフィリピンで過ごした。二人とも母語は現地のビサヤ語だが、幼稚園に通っていたころから英語を学び始め、日常的にテレビの英語放送にも親しんで育った。

今回は教員の後押しなどもあって受験を決断。校内の英検受験者を対象にした課外授業で勉強を重ねたほか、自宅でも単語を覚えたり、リスニング力を磨いたりしてきた。

一月の筆記・リスニング試験と二月の面接試験では緊張したという二人。客室乗務員を目指している坂本さんは「夢に近づけた。不合格だったら受験料がもったいなかったので合格できてよかった」とはにかみ、山之内さんは「将来は英語のスキルを生かした仕事に就くことも考えている。高校でさらに勉強して、卒業後に1級に挑戦できたら」と笑顔を見せた。